

「学校の怪談」に現れる数詞の役割 —世間話と民話との比較から数詞を検証する—

清海 節子

1. はじめに

本稿は、いわゆる「学校の怪談」として世間に受け入れられている現代の「世間話」¹⁾の中で、数詞²⁾がいかにか効果的に使用されているかについて、民話との比較から考察するものである。稲田・稲田(編)(2010: 241)によると、文字からでなく、口から耳へ伝えられた文芸の総称とされる「口承文芸」は、民間説話(民話)、民謡、語りもの、唱歌と、ことわざ、なぞなぞ等から成り立つと考えられている。また、民話は、さらに、昔話、伝説、世間話に分類されているが、本稿では、民話は昔話を指し、伝説と世間話とは区別されると考える。民話と伝説は、口承の散文形式の物語という共通点があるが、伝説は具体的な事跡や人物との結び付き傾向がある。世間話も散文形式の物語ではあるが、様式性や虚構性を重視しない点で、民話とは区別され、語り手の身边で起きた出来事として自由に語られる点で伝説とは異なる。また、「学校の怪談」は世間話(最近では、「現代民話」「都市伝説」とも呼ばれる)の一種であると考えられる。

清海(2015, 2016)では、民話を取り上げて、数詞の種類と役割を考察した。データとして、稲田・稲田(編)(2003)『日本昔話百選(改訂新版)』を選び、日本民話での数詞の用法で表現される傾向について調査した。100話全体にかんする数詞の出現率を把握することを試み、考察した結果、データの9割以上で「数」が使用され、特に「1」「2」「3」の頻度が高く、その中でも「1」は、データ全体で8割以上にあることが分かった。また、「数」の組合せを分類し、「数」が1種類だけの場合には、「1」である可能性が高く、二桁以上の「数」が用いられる可能性が低い傾向がみられた。2種類の

数詞が使われている話は、「1」と別の「数」(一桁)との組合せの傾向が高いことが分かった。3種類の数詞が用いられる話では「1」を含み、その他の「数」が一桁の数であり、4種類の数詞が用いられている話では、 $\{(1, 2, x, y) : x, y \neq 1, 2\}$ という組合せになる傾向が高く、約5種類の数詞は $\{(1, 2, 3, x, y) : x, y \neq 1, 2, 3\}$ になる傾向があることが分かった。調査結果から、 $\{1, 2, 3\}$ までの結び付きは、ある程度強いが、 $\{1, 2, 3, 4\}$ 以上は、連続性が保たれにくい傾向があると提案した。さらに、「数」に於いての反義性(一桁と三桁以上との対立)は、4種類から5種類の数詞が用いられている話では、相対的に多い傾向があると推測された。従って、民話のテキストの中で複数の「数」を提示する方法には、秩序があること、また語り手の伝承能力の視点から検討すると、「数」の用法にはある程度の規則性が見出され、伝承機能の一端を担っていることが明らかにされた。本稿では「学校の怪談」と呼ばれる世間話に用いられる「数」の種類と頻度を調査し、清海(2015)で示された民話に於ける数詞の特徴と比較する。さらに、実際の怪談で「数」がいかにか効果的に使用されているかを検証していく。

次の2節では、最初に、高木(2005)を参考に、柳田と折口の「怪談」の捉え方の違いについて紹介する。次に「学校の怪談」というジャンルを確立した先駆者の松谷(1987)と常光(1993)について簡潔に紹介した後、口承文芸という観点から、彼らの研究に言及している山田(2005)と高木(2005)、また口承文芸に言及している吉沢(1985)などを取り上げる。3節では、久保(1997)を資料として、学校について女子高生が語った不思議な話の表現の中の数詞を調査し、民話で得られた結果(清海

2015)と比較する。また、資料から4話を選び、いかに数詞が効果的に使われているかを検証する。最後に4節では結論が述べられる。

2. 「学校の怪談」の先行研究

本節では、「学校の怪談」を論じる前に、「怪談」が民俗学に於いてどのように扱われてきたかについて、高木(2005)を参考に説明する。高木(2005)は、柳田國男と折口信夫の怪談のアプローチを分析し、分かりやすく比較している。次に「学校の怪談」という名での世間話を一種のジャンルとして確立させた先駆者である松谷(1987)と、その普及に貢献した常光(1993)を手短に紹介する。後半は、「学校の怪談」に対する批判と問題点を「口承文芸」という視点から提示する。

2.1 民俗学に於ける「怪談」の捉え方

高木(2005)は、「怪談」は民俗学では冷遇されてきたと述べ、柳田國男に言及している。柳田(1934)³⁾では、「言語芸術」の中に「怪談」という語が見つけられないが、「妖怪」は登場しているのである。また「妖怪」は主に「心意諸現象」として全国的に収集すべき価値があると、柳田(1998:184)は述べている。高木によると、「妖怪」は「神」に対する劣位項としてみなされていた可能性が高いと考えられる。ところで、高木(2005:201-206)は、柳田が「怪談奇談」という語は使っているが、その扱い方に留意すべきで、口承文芸の昔話の中で、「童話」を完形昔話としている一方で、「怪談奇談」は「笑ひ話」と共に「派生昔話」として位置づけられていると指摘している。従って、柳田は、「怪談」を口承文芸の中で、中核をなすものでなく周辺的な位置にあるものと考えていたのであろう。高木は、次のように説明している。

かくして柳田による「怪談」は「妖怪」という心意現象に一步譲る口承文芸として捉えられ、さらに口承文芸の昔話のなかでも完形昔話に一步譲る派生昔話として捉えられ、いわば二重に劣位に

置かれた存在だったのである。加えて、心意現象のなかでも「妖怪」を「神」に対する劣位項(柳田監修『民俗学辞典』では「俗信」の列に配された)と見るならば、「怪談」は三重の劣位に置かれた存在ということになるだろう。

高木(2005:204-205)

柳田とは異なり、折口信夫は「…怪談は、昔咄であり、お伽話であった(折口1996:216)⁴⁾と述べているように、怪談を派生昔話とは捉えずに、「昔咄」「お伽話」の中心という位置にあると考えている。さらに折口は、柳田が用いた「昔話」ではなく、「お伽話」という語を用いて論を進め、渋川版『お伽草子』⁵⁾は、異類物・妖怪物が中心的な役割を果たしているのではないかと主張している(折口1995:320)⁶⁾。お伽草子以外の読本にかんしても折口はすべて怪談が基礎になっていると述べていることから、折口は「お伽」と名のつく作品はすべて、魔物を駆逐するための「怪談」と考えていたと、高木は述べている(高木2005:208)。

また、高木は、折口が「怪談」をお伽話だけでなく、芝居論の中でも取り上げていることを論じている。折口(1995:400)は、いわゆる「怪談物」という芝居が夏に行われることが清涼のためでなく、本来盆狂言の出し物で、旧暦の7月の残暑以降の出し物であり、無縁亡霊を鎮めるための幽暗な地芝居が多かった。⁷⁾ 関東から中部地方で盛んであったので、初秋の盆は江戸芝居でも怨霊退散の狂言が行われたという。さらに、高木によると、柳田が盆行事は盆にもどる精霊や祖霊をもてなす行事であると説いたのに対し、折口は無念仏や怨霊を和めるための行事であると説き、御霊信仰⁸⁾という側面を重要視していた。そこで、折口は「怪談」を 1)お伽話の中心としての「怪談」、2)御霊信仰を説く盆狂言としての「怪談」、という二つの捉え方をしていたと高木は考えている。従って、「怪談」を昔話と比較して劣ると考えた柳田とは逆に、折口は「怪談」を積極的に評価していたと結論付けている。⁹⁾

2.2 松谷 (1987)

松谷(1987)は、序文「明日の民話のために」の最初に、民話を過去の遺産として縛るのではなく、現代と結びつけるように提言したのが木下順二であると書いている。また現代社会で、生み出されている民話というものの存在を確立することを模索したことに触れている。1978年に、松谷(他)が結成した「日本民話の会」が『民話の手帖』という全国紙を発刊し、その紙面上で、現代の民話収集のために、アンケートを呼びかけたのである。明治以降の話を目安に収集し、上下二つの口・密造酒・偽汽車・天狗・河童・文明開化・学校の怪談・ラジオ、テレビ局の笑いや怪談・軍隊等を扱ったと述べている。松谷(1987:15-16)は、当時早稲田大学教授であった鳥越信から示唆され、「学校の怪談」をまとめたという。二度にわたって収集した話は幽霊、座敷わらし、河童、のっぺらぼう、一つ目、こっくりさん、天井が降りてくる、血が滴る、彫刻が動き出す、など多彩で日本の妖怪が寄り集まっているようであると述べている。松谷はそれらの話を以下の6種類に分類している。

- (1) (i) 学校の施設や備品にまつわるもの。これには、学校そのものの成立、たとえば墓地の上や城跡、処刑場の跡に建てられたというものから、寄宿舎、便所、音楽室、理科室、体育館、教室、宿直室、廊下や階段、プール、時計台、エレベーター、ピアノ、鏡、絵、彫像、写真など。
- (ii) 魂や幽霊の訪れ、先生や卒業生、同級生などの幽霊、死のしらせ、抜け出した魂など。
- (iii) 戦争にまつわる話、憲兵司令部、兵学校、空襲、原爆など。
- (iv) 神様や妖怪など、水神や座敷わらし、河童、のっぺらぼう、口裂け女など。
- (v) 異次元の世界。
- (vi) その他、七不思議、不思議な場所など。

松谷によると、上にあげた分類の中で、学校という空間で起きる話が他を圧倒して、多数見つかった

たというが、その当時の学校の建物が木造であり施設として不気味さを孕んでいたもので、当然のことではないかと説明している。同時に、松谷は、朝登校して夕方には離れる場である学校という明るい空間に、怪談がこれほど見つかったことに驚いている。松谷(1987)は、「怪談」と「笑い」の2章から成り、第1章の「怪談」は以下のように21に分けられている。

- (2) 1. 校舎のいわれ 2. 寄宿舎の怪
3. あかずの間など 4. 体育館やプールの怪
5. 怪談やエレベーターにまつわる話
6. 便所にまつわる怪 7. 呪われた場所
8. ピアノにまつわる怪 9. 絵にまつわる怪
10. 人形の怪 11. 動く彫像 12. 写真の怪
13. 鏡の怪 14. 振り時計 15. 七不思議
16. 学校のジंकス 17. 幽霊のおとずれ
18. 不思議なもの音 19. 軍隊・戦争にまつわる学校の怪談 20. 学校の妖怪や神たち
21. 不思議な場所

各項目はさらに分類されているものもある。例えば、(2)の「1. 校舎のいわれ」を例に説明していく。この項目は、次の5つに分けられている：

- a. 墓地の上の校舎 b. 処刑場などのあとの校舎
- c. 城や戦場のあとなどの校舎 d. 人柱のたたり
- e. 工事事故のたたり。松谷(1987)は明記していないので分からないが、多分、典型的だと思われる話を最初にあげているのではないかと推測される。一つの話が紹介された後に、「分布」として、ほとんどの場合、県名と学校名が記されている。それから各類話が紹介され、最後に「話者」「回答者」または、「出典」が書かれている。

それでは、実例を見ることにする。「1. 校舎のいわれ」の最初の項目である「a. 墓地の上の校舎」では、次の話（典型的であると思われる）が初めに紹介されている。

- (3) 友人から聞いた話。昭和四十年代、山口県下のある公立高校で、五、六年続けて毎年一人現職の教

職員がなくなった。腹のがん、心臓、脳の出血などの病気や山の事故と理由はそれぞれあったが、毎年一人、国語、社会などがう教科の人が死んだ。「今度は何々科の番だ」冗談に言い合っていたら本当にそうなった事もあった。そのうち「この校舎を建てるときに、墓があったのをのけて作ったのでそのタタリだろう」という噂もたつようになった。おはらいを實際にした。一回目のおはらいのあとともなくなった。「あの時は簡素で謝礼も少なかったのでききめがなかったのだろうと」いうことになり、もう一度全教員参加のおはらいをしたら、死ぬ人が出なくなった。

山口県・柴田晃尾／文（松谷1987：24）

次に、「分布」には、上の話を含む11例が挙げられている。場所としては、岩手県二戸市のある小学校、宮城県遠田郡、東京都東久留米市西中学校、長野県中野市中野高校、沖縄県八重山郡のある小学校などがある。以下は、長野県中野市中野高校での話である。

- (4) 私の勤めた時期は生徒の急増期で、プレハブ様の校舎が造られた。その校舎の床下から夜半すぎになると決まって、人のすすり泣きもれ聞こえるという。A先生などは実際に聞いたこともあると話してくれた。急遽建て増したため、かつての墓地跡に無造作に建てたので死者の怨霊が泣きわめくのだと伝えられていた。(墓地跡であったことは事実のようです。) 回答者・細川修(長野県在住) (松谷1987：26-7)

(3)と(4)を比較すると、墓地の上に校舎が建てられたために、人が亡くなったり、人のすすり泣き聞こえるということから、死者の祟りまたは怨念話になっている点以外で、特に共通すると特徴が見つけられない。つまり、松谷(1987)は、このように厳密でなく、大雑把な方法で、21項目に分類した「怪談」をまとめて紹介することに終始し、話についての分析や考察などは一切おこなっていない。¹⁰⁾

2.3 常光 (1993)¹¹⁾

常光(1993:1-3)によると、社会変化が、語り手と聞き手を取り巻く全体の関係に影響を及ぼした結果、伝統的な昔語り弱体化し、1970年代初めには、伝承の危機が叫ばれていた。そのような状況下で、常光は昔話だけでなく、現代の〈はなし〉にも興味をもちはじめ、1985年の夏、勤務先の中学校で放課後に生徒から話を聴いた。10日間で、160ほどの現代の〈はなし〉を記録し、その内容の豊かさに惹かれたという。多岐にわたる種類の〈はなし〉の中に学校にまつわる怪談や不思議話が非常に多かったとのことである。「学校の怪談」は口承文芸の対象としては新しい領域であるが、子どもにとっての伝承世界の一部でしかない指摘した上で、「本書は口承の〈はなし〉をおもな手掛かりとして展開を試みたが、その根幹には、学校という近代が生みだした制度が横たわっているのを忘れてはないと思う」(常光1993:3)と主張している。

常光(1993)は (I)世間話 (II)昔話の二部構成になっている。(I)世間話は「学校の怪談」「現代の〈はなし〉」「世間話の周辺」に分けられている。ここで注目すべきは「学校の怪談」が世間話の代表として扱われている点であろう。松谷(1987)とは異なり、常光は、「学校の怪談」の話の内容にかんする分析と考察を中心に据えて、次の順で論じている：1.よみがえる民俗的感覚 2.トイレと怪異 3.特別教室と移動教室 4.学校周辺の異界的空間 5.うわさとしての怪談 6.子どもたちのための怪談・妖怪・異界。紙面の都合上、詳細には語れないので、「2.トイレと怪異」(常光1993:5-20)を少し紹介するだけに留める。ここでは、小中学校のトイレ空間に焦点を当てて、子供と怪奇の関係が考察され、全部で14話¹²⁾の話が取り上げられているが、その内7話は、2.2で紹介した松谷(1987)からの引用である。まず、「赤い紙・青い紙」と呼ばれるトイレを舞台にした怪異談を扱い、色にまつわる松谷(1987)の19例から、色の組み合わせを調べている。「赤青」(8例)「赤白」(4例)「赤青黄」(4例)等があり、赤が基本色

となり、血の印象と結びついていること、また、三原色セットが組み込まれる興味深い話などの報告をしている。次に「赤いはんてん (=半纏)」、「便器からでる手」、「のぞいていた顔」と呼ばれるトイレにまつわる話を紹介しながら内容の分析がされる。最後に、取り上げた話以外にも「はなこさん」(女子トイレでドアを15回叩き「はなこさあーん」と呼ぶと「はあーい」と返事がくるという話)など数多くの話があり、なぜ怪異がトイレという空間に頻繁に発生するのかという理由が考察される。以前の暗いイメージがあったトイレは、現在は近代設備で整えられているにもかかわらず、不安の付きまとう非日常的空間であり続けているのである。その理由は、孤立する空間での生理的、心理的な不安のためであるという。つまり、トイレが一般に北側で陽の射さない場所のために暗い印象を与えるからというのではなく、「…そこを使用する人の行為と意識のうちに、不安で、曖昧な精神をもたらす原因が潜んでいる」(常光1993: 18)と提示している。

2.4 「学校の怪談」に対する批判— 口承文芸との関連性

高木(2005:224)が、常光の論文で最初に気づいたことは、「怪談」や「学校の怪談」が何を表すのかという「定義」がないことであった。つまり、学問的な定義がないまま、「学校の怪談」という語が世間に広まってしまったと批判している。そこで、高木は、口承文芸としての「怪談」と、いわゆる「学校の怪談」と呼ばれる話との関連について論じている。まず、口承文芸について次のように説明している。

口承文芸は、柳田國男に拠るならば、狂言綺語、アヤコトバ、口碑、言語芸術とも換言できるように、「語」「コトバ」「口」「言語」の問題であった。それは私流に言い換えるならば、何を伝えているのかという話の内容ではなく、どのように伝えているかという話の言説もしくはその文脈・背景が大きな指標となるべき問題であった。物語内容(イ

ストーリー)ではなく物語言説(ディスコース)およびその文脈・背景(コンテキスト)の問題であった。柳田が昔話をコトバの領域であるとして口承文芸に含めたのに、伝説をコトバの領域であるとして口承文芸に含めようとはしなかったことを想起したい。(高木2005: 217-218)

そして、高木(2005:227)は、常光は「口承」ではなく、「心意現象」に興味があったので、「学校の怪談」ではなく、「学校の怪異・妖怪」と表現すべきであったと主張している。つまり、常光は聞いた資料を提示はしているものの、口承資料として提出していない。「学校の怪談」を分析するとき、「どのように」話したかではなく、「何」を話したかに留意し、ことばでなくコトとして扱っていると高木は述べている。従って、以下のように常光の「学校の怪談」は、口承文芸として考えるのは適切ではないと明言している。

…常光の「学校の怪談」は、題名こそ「怪談」を用いて口承文芸の新たな領域を切り開いてみせたかのように装っていたが、内実は心意現象を扱う手つきによっていた。私は常光を批判しているのではない。何よりも、柳田國男が、民俗学の目的は心意現象の解明にあるというのだから。しかし、口承文芸研究あるいは<口承>研究に限っていうならば、常光の「学校の怪談」が口承文芸としてなんらの定義づけも、なんらの言説分析もなされていなかったことは、口承文芸あるいは<口承>の研究に興味を持つ読者ならばぜひともふまえておかなければならないだろう…。

(高木 2005: 230)

同様に、山田(2005:142-3)は、「口承文芸」という枠組みで取り組んだはずの常光(1986)は、生徒から直接聞いた話について分析しているのだが、いつ聞いたのか、また自身の役割が話の採集にどのような影響を与えたかなどには留意がされていないことを指摘している。さらに、分析には、資料のあらすじだけが利用され「声」や「話」の言

及がなく、「レポート報告」と「話」は区別されず同等に処理されているのである。そして、山田は「話すこと」と「書かれたこと」は全く別のものであることは今更言うまでもあるまい（山田2005:143）と述べている。また、「学校の怪談」において「口承文芸」という「枠組み」は、「怪談」の日常のコミュニケーションという面を見えなくさせ、完成度の高い「話」を特化させてきたといえる（山田2005:144）と主張している。つまり「怪談」を論じる資料は書かれた文面であり、コミュニケーションとしての資料が集積されなかったと結んでいる。¹³⁾

また、高木は、常光だけでなく、最近の書店で、「現代民話」「現代伝説」「都市伝説」というタイトルの本を取ってみても口承資料が入っていないと言う。そして、怪異妖怪研究者など専門家だけでなく、自称民俗学者や口承文芸研究者、社会的に認知されている人の資料集にもないので、不思議であると述べている。¹⁴⁾ さらに、高木(2005:245)は、注(28)で、録音からの翻字資料だけが口承資料なのかと反論されることに対して、少しでも推敲した資料を口承としてしまうと、書かれたものすべてが口承になってしまうと指摘する。そして柳田が口承世界を文字と対立させたところに設定したことに言及している。

しかしながら、吉沢(1985)によると、柳田は語りに対する理解が不十分であったようである。「学校の怪談」とは離れるが、口承文芸について、もう少し考えてみよう。吉沢は、昔話を考えることについて、「語り」という要素の重要性を説き、昔話が口承資料から切り離され、内容だけを検討することは望ましくないことであると主張している。優れた話し手にとって、昔話の語りが単なる話しの筋書きではないこと、そして、昔話の語りの面白さは、語り手と向かい合い、発話される言葉を直接聞くことではじめて味わえるものであると述べている。この点に関連して、吉沢(1985:132)は、柳田の語りに対する意見を紹介している。それは、柳田(1935)¹⁵⁾が島原半島の民話の採集についての考え方を記した一部である。

…全国一様に三期四期の状態に入ってしまったならば、末には、何の為に昔話を集めるのかを、答えることの出来ない採集家ばかりが、鉢合わせをするやうな社会にならぬとも言へない。私の判定にして誤らざれば、肥前の島原半島ももう第三期に入っている。此集の過半には新たな作為の痕が見え、又故意の省略さへ認められる。それを誠実に拾録するといふことは、無駄では決してないがそんな仕事、甚だ張合ひの無い骨折りとまでは言へるであらう。（柳田 1935）

吉沢は、柳田が昔話を固有信仰究明のための資料として扱い、伝承の歴史を四期に分けるという分析に成功していると認めてはいるが、語り手の言葉を真摯に捉えようとして耳を傾ける平凡な聞き手ではないと批判している。昔話には、古い民族の信仰が宿ってはいることは否定できないが、同時に口承文芸としての性質を探求する重要性があることも忘れるべきでなく、そのためには、具体的な語り口を知らなければならない。従って、昔話を正しい資料として保存するためには、文芸としての語りの本質を十分に理解できるような良きリスナーになることが求められると、吉沢は提言している。

Moore (1993)は、アメリカインディアンで80歳後半の女性から、同じ民話を5度聞き取った記録を考察している。あらずじ、話す人物の素性等は、かなりの変化がみられたが、登場人物のセリフは一定して変わらないという興味深い発見をしている。またMoore (2006)は、文字を持たない文化の口承文芸に於いて、一体「テキスト」とは何であるかという根本的な問題も提起している。実際にMoore が語り手から民話を記録した際、話し手が横道に逸れたり、話の修正をしたり、余談が入ったりしたが、「テキスト」とは、民話の筋だけが関係しているのであろうかという疑問である。この疑問を考慮するにあたって、Jakobson (1960:366) : 'A performance is an event, but the poem itself, if there is a poem, must be some kind

of enduring object.’ (パフォーマンス (=語り) は、出来事ではあるが、詩そのもの—もし仮に詩的なものがあるとしたら—は、ある種の永続的なものに違いない) を思い起こすべきであると指摘している。

以上のように、語りを記録するという問題に対して、どのような取り組みがされるべきであるのだろうか。宮廻(1995ab)は、音声を文字化し、資料としての記録(テキスト・メイキング)の問題点と方法論を提示している Fine(1994)を紹介している。Fineは、口承資料(フォークロアのテキスト)の本質は、ダイナミックな過程であり、発話、動作、場、相互作用が統合されたものであると説いている。テキスト作成者の仕事は、語りのパフォーマンスを再現するため、‘aesthetic transaction’(美的やりとり)を記録(‘record’)し、美的場面を報告(‘report’)することであると定義している(Fine 1994: 111)。実際に Fine(1994: 182-195)は、言語での説明、記号、シンボルなどを駆使しながら、アフリカ系・アメリカ人学生の「トースト」(‘toast’)と呼ばれる黒人の民間伝承をビデオテープで撮り、それを基に「パフォーマンス中心のテキスト」(‘performance-centered text’)を作成している。しかし宮廻が指摘する通り、このテキストは複雑で判読し難いのである。また宮廻は、松谷(1986)のテキストに触れ、最初から文字化されたか、口承としても語られたものとしてではなく、整理者によって書かれたあらすじであると批判し、現代の伝説のテキスト・メイキングは再検討する余地があると主張している。

一方で、日本では、野村(1995)が「口裂け女」の伝説がいかにか生成されていったかを追求していることは、現代伝説の分析では興味深い論考だと宮廻は述べている。また、池田(他)(編)(1994)が、語りの様態などは説明されていないが、語り手、回答者の情報だけでなく、語りの場所を明記する工夫をしているので、資料としての価値があるとしている。さらに、複数の語り手による語り(ポリフォニック=多音性の)が存在し、それを

モノフォニック(単音性)な語りとして文字化することは問題がないとは言えず、検討すべきであると宮廻は考えている。ポリフォニックな語りにかんして、高木(2005:232-241)は、岡本(1996)の資料が、きわめて重要であるという。中学校の同級生5人(岡本も参加者の一人)が7年ぶりで会って、中学校時代によく話していた怖い話を録音した口承資料である。各人が話したことをすべて見やすく記述したものであり、動作についての短い説明も伴い、参加者のダイナミックな話の生成が観察可能になっている。

2.5 まとめ

この節では、初めに、柳田と折口を比較し、「怪談」の捉え方の違いを確認した。次に「学校の怪談」というジャンルを世間話の中に確立した松谷(1987)と常光(1993)について簡潔に紹介した後、「学校の怪談」に対する批判を検討した。常光(1993)には「学校の怪談」の定義がないこと、さらに、口承資料としての「学校の怪談」が不在であることが問題とされている。つまり、常光は「学校の怪談」を口承文芸としてではなく、心意現象として扱っていると、高木(2005)は指摘している。口承にかんして、吉沢(1985)は、柳田が昔話の語りに耳を十分に傾ける態度が欠けていたと批判している。一方で、Moore(1993, 2006)は、語り自体に注目し、テキストとは何かという疑問を問うている。宮廻(1995ab)は、Fine(1994)を紹介しながら、民間伝承のテキスト作成の重要性を説き、松谷(1987)のテキストは語りでなく、整理者によって作成されたあらすじになっていると批判している。

以上から、「学校の怪談」は、民話(昔話)のようなレベルでの口承文芸とは言えないことは明らかである。また、定義がされていないと指摘する高木(2005)に従えば、「学校の怪談」という名のもので集められた話自体に問題があることになる。また説明者が語られた話を自分なりにまとめてしまった場合、口承文芸とはみなされないであろう。本稿では、「学校の怪談」は学校という場所で発生

する怪奇な話として定義し、資料としては高校生が語る話を集めた久保(1997)を使用することにした。久保は教え子たちの語りをメモに集めたと「あとがき」(久保 1997:261)で書いているが、高校生の語りがどの程度、テキストに生かされているか定かではない。ただ、語り手は、小学生や中学生でなく、15歳以上の高校生であり、自分なりの語りがあったことが想像される。

3. 女子高生の語る「学校の怪談」

この節では、女子高生の語る「学校の怪談」での数詞の種類を調査し、清海(2015)で得られた民話での結果と比較する。さらに、生徒の話(テキスト)をみながら、いかに数詞が話の伝承に役立っているかについて検証する。

調査するデータ資料は、久保(1997)で、函館大妻高等学校の研究集録『大妻』に「高校生が語る現代民話」として掲載された話から成立している。タイトルは『女子高生が語る不思議な話』であり、「怪談」という語は使われていない。函館大妻高校の女子高生が1992年から1996年までに語った不思議な話が収められている。毎年一回およそ200名の学生を対象に収集した2000話から1200話を選び、久保が分類整理している。「家」「学校」「病院・宿」「トイレ」「車」「霊」「夢」など15の場所や事物に分類されている。その中で、今回は、「学校」の項を選び、表現の中の数詞の種類に注目する。

3.1 調査結果

久保(1997:25-50)は、「学校」という分類で、162の話を紹介している。それぞれの話には、タイトルがあるが、久保が考えたものか、学生が言ったものかは分からない。本文には番号が書いていないが、便宜上、No.1 から No.162とした。以下に調査結果の一覧表を提示するが、左の欄は、()に通し番号、そして「数」が含まれる話の番号とタイトルを書き入れた。中央の欄には、数を含む語または、語句を書き入れた。数の前後(助詞など)はできるだけ書き添えた。数を含む語彙である「一

緒」「一生」「一体」「一生懸命」などは数を表現する訳ではないので、考慮に入れていない。「一人も…でない」のように、数が否定の意味に使われている時は[neg]を付けた。また、「何人か」「数名」などは数が特定できないが、助数詞に伴われ、「2」または「3」を曖昧に意味しているため、数を表すとみなし、()に書き入れた。但し、助数詞や数の表現が伴わない、「誰も…」(否定文で、「0」に相当する数を表すと考えられる)や「たくさん」等は考慮に入れなかった。数を含む同じ表現が他の数に挟まれず繰り返されている場合は、[…] x 2のように表記し、繰り返されている回数を‘x’後にアラビア数字で記した。また、久保(1997)のテキストの数字は、すべて漢字で書かれているが、「一〇」など、分かりにくい場合は、「十」や「10」に変えて表記した。右の欄には、{ }の中に、その話全体に出現する数の種類を低い数から順で記入した(‘x’は、「数日」、「何日」などの表現での数を示す)。

表1 久保(1997:25-50)の162話にみられる数詞の一覧表

No. タイトル	数が用いられている語・語句	数の種類
(1)3『ケタケタ』	一年のとき	{1}
(2)6『小学校の鏡』	(何十年か) 一番奥の	{1, 10}
(3)7『鏡』	九時十分に 九時十分を	{9, 10}
(4)8『家事の夢』	三年の時 三回位 三回 くらいのうち一回 三年の時	{1, 3}
(5)9『忘れ物』	三人組の 三人の 一人の 二人は	{1, 2, 3}
(6)10『見廻り』	十二時に	{12}
(7)11『化学の時間』	二年の時	{2}
(8)12『机がひっくり返った話』	中二のとき	{2}
(9)13『霊のいる教室』	一年生だった時、一年三組 には 一年三組に	{1, 3}
(10)14『白い手』	三 - C には 二、三人 の 三 - C のドアの	{2, 3}
(11)15『曾祖母ちゃん の信号』	三、四年生位の	{3, 4}
(12)16『AかBか』	三年A組の	{3}
(13)19『赤い灯』	一年の時、七時を 四 階で一番奥	{1, 4, 7}
(14)20『夜の学校』	一つ一つ見て 二回 一 回 二回	{1, 2}

「学校の怪談」に現れる数詞の役割
 一世間話と民話との比較から数詞を検証する一

(15)21『いじめられた女の霊』	(何回も) 10年前	{x, 10}
(16)22『不思議な声』	六年生の時 六年の三学期に 五年生の五年A組の 六時を過ぎ	{3, 5, 6}
(17)23『お婆さんの幽霊声』	高二の時 二人目 二人目の 一番びっくり	{1, 2}
(18)25『のろわれた旧生徒会室』	二人が 二人で	{2}
(19)26『理科室』	一定の時間	{1}
(20)27『骸骨と踊る』	一年の時	{1}
(21)28『中学校の理科室の前の廊下』	六年位 一人が 四人と 四人は	{1, 4, 6}
(22)29『学校の怖い話』	一年生の廊下を	{1}
(23)30『校舎での肝だめし』	六年生の時 二人組を一周を	{1, 2, 6}
(24)31『火の玉を見ると人が死ぬ』	二年生の六月の 第二理科室で もう一人の二人で 第二理科室の八の字を 三軒目に二, 三日後に	{1, 2, 3, 6, 8}
(25)32『おかつぱの女の子』	二年生のとき 三年生に(何日か)	{2, 3, x}
(26)33『美術室の赤いドア』	二階の	{2}
(27)34『用務員のおじさん』	一人で 一Fに 一人で 二枚の	{1, 2}
(28)35『腕が切れた話』	(何人かで) 一人の	{1, x}
(29)36『ミシン室』	午後六時に	{6}
(30)37『猫の鳴き声』	一人の生徒が	{1}
(31)39『おかつぱの女』	一年生 三人の 一人の [三人の] x 3 一人がもう一度	{1, 3}
(32)42『Sちゃんの話』	10月頃 三つあみを一人 [三つあみの子] x 2	{1, 3, 10}
(33)43『コピー』	一人の	{1}
(34)45『猫の鈴』	五時三十分に 二年の五時四五分に	{1, 2, 5, 30, 45}
(35)46『鏡』	もう一度	{1}
(36)47『血まみれの小人』	四階建て 二階の 三階には 四階の	{1, 2, 3, 4}
(37)49『羽を打つ音』	(何年か前)	{x}
(38)50『小学校の体育館』	五年生の時 10分位 七時頃で	{5, 7, 10}
(39)56『七不思議の一』	七不思議の一つで 夜中の十二時に	{1, 7, 12}
(40)58『体育館の花子さん』	夜三回廻って	{3}
(41)59『四時十四分十四秒』	四時十四分十四秒に 三回	{3, 4, 14}
(42)60『恐怖の体育館』	一人の 10分くらい も 一度 一人の	{1, 10}
(43)61『お前に殺された』	三人の [一人は] x 3 一回 [二回] x 2 一回	{1, 2, 3}

	ボンと	
(44)62『鍵』	(何年か前) 六年生の	{x, 6}
(45)64『サンドイッチになった時』	一個 二年前に	{1, 2}
(46)65『怪談のある怖い話』	六年の時 10人位で 30分 一箇所に (数人)	{1, 6, 10, 30}
(47)66『舞台の下から音』	(何人かが) もう一人も (何日か)	{1, x}
(48)67『大妻七不思議』	一週間 二十歳の 七不思議	{1, 7, 20}
(49)68『廊下に血痕』	一か所だけ	{1}
(50)69『古い学校』	ひとりで	{1}
(51)71『下半身の無い女の子』	(何年か前に)	{x}
(52)72『壁の中を走る白い影』	一番端の	{1}
(53)73『不思議な廊下』	50歩位 60歩位 第一職員室の 五歩位 10~15歩も 一番端に	{1, 5, 10, 15, 60}
(54)74『天井き破る』	一人の 二階の 三階	{1, 2, 3}
(55)75『夜の廊下』	一つだけ 約30センチ	{1, 30}
(56)77『白い女』	二年生の時 一番のりで	{1, 2}
(57)78『外された鏡』	一人の	{1}
(58)83『黒い人影』	二人で	{2}
(59)85『いじめっ子』	三人が 三人は 三日前に 三人は	{3}
(60)88『部屋の扉の小窓』	四年生位の時	{4}
(61)89『体育館』	[二人の人が] x 2 二人が	{2}
(62)90『体育館の下』	[十二時に] x 2 一人の 四, 五人	{1, 4, 5, 12}
(63)91『音楽室』	一人の	{1}
(64)92『ピアノ』	一人で	{1}
(65)93『グラウンド』	もう一度	{1}
(66)95『黄色いカッパの男の子』	七不思議の一つ	{1, 7}
(67)96『プール』	一人 一人の	{1}
(68)97『用務員のおじさん』	10年以上 [一年生の] x 2	{1, 10}
(69)99『階段』	二段程	{2}
(70)100『追いかけてこ』	一人で	{1}
(71)102『火の玉』	もうひとつ 三角形に 一人で	{1, 3}
(72)103『小人が現れる』	三階と四階の 四階で	{3, 4}
(73)105『お地藏さん』	三, 四年の 一部の	{1, 3, 4}
(74)107『鏡の中から手が』	三人の 三人は 一階と二階の	{1, 3, 4}
(75)108『学校の鏡』	十三番目に	{13}
(76)109『エレベーター』	七つの 三階建て [neg] 一, 三人じゃ開けられない 二年上の	{2, 3, 7}
(77)110『幽霊』	中二の	{2}

(78)111『部屋』	一年生の時	{1}
(79)113『声』	三年生の (何人かの人) (数秒後に) 八月に	{3, 8, x}
(80)115『音』	五月の 二人で 二, 三秒位	{2, 3, 5}
(81)117『下半身の ない女の子』	(何人かの人)	{x}
(82)119『おかつぱの 女の子』	二階の 一人の 六時頃	{1, 2, 6}
(83)120『足の音』	二人と	{2}
(84)121『青い光』	二時位に 二人が 二 人を 二人に 二人は	{2}
(85)122『同窓会館』	一人 二階で	{1, 2}
(86)123『合宿』	高一のころ 一人が 一階に 二階で 一階	{1, 2}
(87)124『修学旅行』	(何歳か上の) 一枚一枚 に	{1, x}
(88)126『学校キャン プ』	[neg] 一度も見たことあり ません	{1}
(89)128『寮』	二人で もう一度	{1, 2}
(90)129『黒い足』	三年前 二人で 二, 三 分 一定の もう一人	{1, 2, 3}
(91)130『大学寮』	二階の	{2}
(92)133『私の頭』	[一ヶ月後に] x 2	{1}
(93)134『はさみ』	[一人の女の子が] x 2	{1}
(94)135『だれもいな い教室』	[二人で] x 2 二人しか	{2}
(95)137『ペーターベ ン』	一人の 一番うしろ	{1}
(96)138『墓場で人骨 かじる』	[一時頃に] x 2	{1}
(97)140『交通事故 死』	一人が	{1}
(98)143『昔の墓場』	一年から二年に	{1, 2}
(99)146『光る目』	六年生だけ 二人ペアで 一周する 二人は	{1, 2, 6}
(100)147『動く目線』	十二時に	{12}
(101)149『モーツァ ルトの血』	十二時丁度に	{12}
(102)153『無人の部 屋から声』	一人の 八時ころ	{1, 8}
(103)154『赤いドレ スの幽霊』	第一音楽室で	{1}
(104)157『白い服の 女』	高二的 二人で 十五 時近く 第二講堂の 一番最後 高一の 二人 の 一人の 一年生が	{1, 2, 15}

3.2 「学校の怪談」の数詞の種類

3.1の表1が示すように、162話の中、104話に数詞が使われていることが分かった。割合で示すと、162話の64.2%に相当する。¹⁶⁾ 大雑把に言えば、データ「学校の怪談」の半数以上に数詞が使われて

いることになる。また、数詞が用いられている104話に限定して考えると、出現する頻度が一番高いのは「1」の67話であり、(104話中)64.4%になる。次に多いのは「2」で36話(34.6%)となり、頻度がかなり低くなる。それ以降の順は、「3」(24話:23.1%)、「10」(9話:8.7%)、「4」(8話:7.7%)、「6」(8話:7.7%)、「5」(6話:5.8%)、「7」(6話:5.8%)、「12」(5話:4.8%)、「8」(3話:2.9%)、「15」(2話:2.0%)、「30」(2話:2.0%)であり、最後に1話(1.0%)だけに使われている数詞は、「9」「13」「14」「20」「45」「60」である。頻度の多い順に並べると、「1, 2, 3, 10, 4, 6, 5-7, 12, 8, 15-30, 9-13-14-20-45-60」となる(同頻度は[-]で繋げている)。表で示すと次のようになる。

表2 「学校の怪談」104話中の数詞の頻度の順位

頻度	1位	2位	3位	4位	5位	6位
	64.4%	34.6%	23.1%	8.7%	7.7%	5.8%
数詞	1	2	3	10	4, 6	5, 7

頻度	7位	8位	9位	10位
	4.8%	2.9%	2.0%	1.0%
数詞	12	8	15, 30	9, 13, 14, 20, 45, 60

上の表から明らかであるが、今回のデータの数詞は、一桁と二桁で18種類が見つかった。一桁の数詞は「1」から「9」まで現れていて、「1」の頻度が最も高く、「9」の頻度が最も低い。また二桁は「10~60」までであるが、「10」の頻度が最も高い。

3.3 民話に於ける数詞の種類(清海 2015)

清海(2015)では、『日本昔話百選(改訂新版)』(2003)の100話を調査した。結果を一覧表(清海2015:62-67)で提示した。このデータ結果では、数詞を含む話が92話(総数の92%)であり、一桁から五桁までの「数」が見つけられた。用いられている数詞とそれが出現する話の数を示すと以下のようになる。

表3 『日本昔話百選（改訂新版）』（2003）

の92話中の数詞の頻度の順位

頻度	1位 94.5%	2位 73.9%	3位 48.9%	4位 20.7%	5位 17.4%	6位 13.0%
数詞	1	2	3	5	7	6

頻度	7位 10.9%	8位 9.8%	9位 6.5%	10位 4.3%	11位 3.3%
数詞	4	8	10, 100, 1000	12	20

頻度	12位 2.2%	13位 1.1%
数詞	15, 2000	9, 13, 23, 33, 40, 60, 77, 200, 699, 700 999, 何百, 3721, 何千, 10000, 何万

表3から、一桁は、「1」から「9」までのすべての数詞があるが、二桁は10種、三桁は6種、四桁は4種、五桁は2種と減少していることが観察される。一桁の中でも「1」「2」「3」が他の数詞を大きく引き離し、数詞が含まれる話92話を基準にすると、最多の「1」（87話）は、94.5%、次に多い「2」（68話）と「3」（45話）はそれぞれ、73.9%と48.9%であった。また、「1」「2」「3」の後が、「4」ではなく、「5」「7」「6」の順になっていたことが注目された。そこで、数詞にかんして用いられている話の数が多い順に並べると「1, 2, 3, 5, 7, 6, 4, 8, 9」になる。「1~20」までの数詞を考慮に入れると、頻度の高い順に「1, 2, 3, 5, 7, 6, 4, 8, 10, 12, 20, 15, 9, 13」となることが分かった。従って、一桁では「9」の表出頻度が一番低く、二桁では「10」が最も多いことがわかる。「10」と同様に「100」「1000」もデータの6話に現れていることから、二桁、三桁、四桁を通じて、「1」で始まり、「0」が続く数詞は一桁「9」より頻度が高いことになる。

3.4 「学校の怪談」と「民話」の比較

3.2で、「学校の怪談」を観察した結果を3.3で確認した「民話」から得られた結果と比べてみよう。

まず、数詞が使用されている割合であるが、怪談が64.2%に対して、民話が92%で、民話の方が1.4倍である。10位までの各数詞の割合を比較すると、民話の方が平均して、1.5~2倍ほど高いことがわかる。このことは、民話が怪談より、数詞を使用する頻度が高いことを表している。次に、数詞の種類を比較すると、民話には、五桁までが使われていたが、怪談は二桁までであり、桁にかんしては、民話より怪談の方が低い傾向があると考えられる。

一方で、数詞の順位にかんしては、怪談と民話は、同じような傾向が見られる。民話も怪談も、「1」「2」「3」が他の数詞を大きく引き離していた。¹⁷⁾ 民話では、一桁の頻度で多い順に並べた結果は「1, 2, 3, 5, 7, 6, 4, 8, 9」で、「1~20」に限って頻度が多い順に並べると、「1, 2, 3, 5, 7, 6, 4, 8, 10, 12, 20, 15, 9-13」（「9」と「13」は同数）となる。つまり、一桁では「9」の表出頻度が一番低く、二桁では「10」が最も多い。今回の学校の怪談のサンプルデータの結果からは、用いられた数詞の頻度の高い順に「1, 2, 3, 10, 4-6, 5-7, 12, 8, 15, 9-13-14-20」（ハイフンで繋げた数詞は同頻度）となり、高い部分が「1, 2, 3」の順で現れていること、8位は「8」であり、「9」が二桁の数詞と同じ程度の低さで現れている点で、共通点が多い結果となっている。残りの一桁の数詞だけを抜くと、4位から8位までの順は、それぞれ、「5, 7, 6, 4, 8」（民話）、「10, 4-6, 5-7, 12, 8」（怪談）である。怪談では「4」の頻度が高くなっていることに注目すべきではないだろうか。「4」は、読みが「よ（ん）」であっても、「し」とも読めるので、「死」との連想から怪談話で使われやすいと想像できる。また、全体の順位にかんして比較すると、最初の順位は、共通して「1, 2, 3」であるが、4位から9位までが、民話では、「5, 7, 6, 4, 8, 10-100-1000」であるのに対して、怪談は、「10, 4-6, 5-7, 12, 8, 15-30」であり、二桁の「10」の順位が怪談で高いのが特徴とみなされるであろう。

以上から、「学校の怪談」と「民話」を比較す

ると、マイナーな違いはあっても、おおよそ同じような傾向があると言える。要約すると、数を利用する割合と、数の種類にかんしては、怪談の方が民話よりも少ない傾向があると言えるが、怪談も民話も数詞の頻度の順位については、多くの共通点が見られた。我々は 2.4 での批判から、「学校の怪談」が民話と同じレベルの口承文芸とは考えられないことがわかったが、今回使用した久保(1997)は、高校生の語りが生かされた資料だったことを証明しているのかもしれない。語り手が15歳以上の高校生であり、確立した自分の語りがあったのだろう。結論としては、次のことが言える。「学校の怪談」と「民話」に出現する「数」の種類と頻度に共通する点が多いことから、「学校の怪談」に於ける「数」は民話と同様に伝承を円滑にする役割を果たしていると推測できる。

3.5 「学校の怪談」に於ける数詞の用法

以下では、表1の中で、数詞が効果的に使われている4話を紹介する。「数」が含まれた語・語句や関連部分には下線を施した。

(5) 31『火の玉を見ると人が死ぬ』

私の中学時代、吹奏楽部に入っていて、夏近くになると練習はわりと遅くまでやっていました。私が二年生の六月の初めの頃だったと思います。吹奏楽部の練習は第二理科室でやっていて、目の前には柳の木に囲まれたテニスコートがありました。その日に限って、私ともう一人の友達はみんなが帰ったあとも二人で残って練習していました。薄暗くなってきたので、「そろそろ帰ろうか」と言ってから後片付けて、第二理科室の隅っこにあるドラムセットのあたりで「暗くなってきたね」と言いながら外をみたら、突然、オレンジ色の玉で長い尻尾がついてるものが窓の下の方から飛んできて、八の字を書くように窓のあたりで回ってから柳の木の方に行きました。柳の木の裏側に平屋の家が並んでいて、その火の玉は平家の家の三軒目にずっと消えていきました。二、三日後に、火の玉の消えて行った家のお爺さんが死んだというこ

とで、「忌中」の紙が貼ってありました。今でもはっきり思い出せる出来事です。

(5) は、5種類（「1」「2」「3」「6」「8」）の数が、「2, 6, 2, 1, 2, 2, 8, 3, 2, 3」の順で現れている。「2」は全部で5回使われているが「二年生」「第二理科室」x2 「二人」「二、三日」と助数詞が異なっている。また、「8」は、数の概念に無関係で、その形を表現するために使われている。

(6) 34『用務員のおじさん』

昔、うちの学校に泊まり込みの用務員のおじさんがいたそうです。そのおじさんは、毎日、毎日、見廻りを一生懸命やっていたそうです。ある日おじさんは真っ暗な校内を一人で見廻っていたそうです。当時、1Fにあった美術室の戸に、真っ暗やみでわからなかったせいか首をはさんでしまったそうです。一人でどうしようもなく、そのまま息をひきとったそうです。以来、その学校の戸びらは、何度ペンキを塗っても、その二枚の戸だけが、真っ赤に変わってしまうそうです。そして夜になると、その用務員のおじさんが校内を見廻りしているそうです。

上の話(6)では、「1」と「2」の2種類の数詞だけが「1, 1, 1, 1, 2」という順で現れている。「1F」という教室と用務員のおじさんが「一人」で大変な目に遭ったことの結果として、「二枚の戸」が血を象徴する赤になってしまうのである。ここでは、この2種類の数 [1-2] が対比され、反義的な用法として用いられていると考えられる。さらに、語彙的に、[真っ暗(闇)-真っ赤] という反義語に近い対立語にも伴われている。¹⁸⁾ 故に、この語彙の対立が [1-2] の反義的解釈の可能性を強めていると想像できる。

(7) 39『おかつぱの女』

私が聞いた話をします。一年生だった時、放課後、福祉課の教室の窓から三人の生徒が外を見ていました。一人の生徒がふと、ワープロ室の方を

見ると、おかつばの女の人はずっと三人の方を見
ていました。ちょっと遠いので、普通はつきり見
えないはずだが、三人の生徒はおかつばの女の
人の顔をはつきり見たのでした。そして、「何して
んのかねえ」と女の人のことを話していると、突
然、おかつばの女の人顔が飛び出してきて、三
人の方に猛スピードで接近してきました。勇気
のある一人がもう一度窓からワープロ室の方を見
ると何もなかったのです。

(7) は、「1」と「3」の2種の数詞だけが「1, 3,
1, 3, 3, 3, 1, 1」の順に繰り返されている。「1」
は、「一年生」、「一人」x 2、「一度」で異なる助
数詞が用いられているが、「3」は、「三人」のみ
で、4回反復されている。最初に「三人の生徒」
と言ったので、残りの3回は「三人」の代わりに
「生徒たち」と表現できるところではあるが、「3」
という数を伴った表現をすることで、「1」（「一
年生」「一人」「一度」）との対比が生まれる。
つまり、「[1-3]」という数詞での反義関係が効果
的に使われている。

(8) 61『お前に殺された』

友達から聞いた話です。この話は、ある学校
で三人の見回りのおじさんが夜、一人は教室、二
人はトイレなど、そしてもう一人は体育館を見回
りに行きました。体育館に見回りに行ったおじ
さんが体育館に近づくにつれて手まりの音が聞こ
えてきました。おじさんが気になって様子を見に
行くと青白くなった男の子が立っていました。お
じさんは、その男の子に話かけても何も答えな
かったので、「質問したことがYESなら、まりを一
回、
ボンとついて、NO だったらまりを二回ついて下
さい」と言いました。するとその男の子に通じた
みたいで、おじさんが、「あなたはこら辺の近く
に住んでいる人なんですか？」と聞きました。す
ると男の子はまりを二回つきました。そしてい
ろいろ聞いて行って、「あなたは、誰かに殺され
た人なのか？」と聞くと、まりを一回ボンとつき
ました。そして、「誰に殺されたの？」と聞くと、

その男の子……「それは、お前だ！」と言った
そうです。

上の話(8)では、「1」「2」「3」と続いた3種の
数詞が「3, 1, 1, 1, 1, 2, 2, 1」という順で現
れ、「1」は5回（「一人」x 3, 「一回」x 2）も使
われている。三人の見回りのおじさんのうちの
一人に起きた話であり、「[1-3]」の対立が表現
されていると考えられるだけでなく、同時に、
まりを蹴る回数が一回（YES）と二回（NO）
として【YES-NO】という反義語¹⁹⁾に伴われ、
反義関係が暗示されていることに留意すべき
である。つまり、「[1-3]」と「[1-2]」の両
方で対立がみられ、反義的用法として捉える
ことができる。

4. 結論

本稿では、「学校の怪談」で数詞がいかにか
効果的に使用されているかについて、民話と
の比較から考察した。2節では、高木(2005)
を参考に、柳田と折口の「怪談」の捉え方
について説明し、次に「学校の怪談」とい
うジャンルを確立した先駆者の松谷(1987)
と常光(1993)について簡潔に紹介した。
さらに「学校の怪談」に対する批判から、
「学校の怪談」の定義がないことや、口承
資料としての「学校の怪談」が不在であ
ることが明らかにされた。そこで、本稿
では、「学校の怪談」は学校という場所
で発生する怪奇な話として定義した。
また、口承(語り)にかんして、吉沢
(1985)、Moore(1993, 2006)、宮廻
(1995ab)、Fine(1994)などを取り上
げて検討し、「学校の怪談」は、民話(昔
話)と同レベルでの口承文芸とはみな
されないと主張した。

3節では、久保(1997)の中で学校につ
いて女子高生が語った不思議な話を「
学校の怪談」のデータとして選んだ。
怪談の表現に用いられている「数」
を調査し、清海(2015)で提示され
た民話に於ける数詞の種類と順位と
比較した。その結果、数を利用する
割合と、数の種類にかんしては、怪
談の方が民話よりも少ない傾向が
あるが、怪談も民話も数詞の頻度
の順位については、多くの共通点
が見

られることが明らかになった。最後にデータから4話のテキストで「数」がいかに効果的に使用されているかを検証した。結論として「学校の怪談」と「民話」に出現する「数」は、似たような傾向がみられたことから、「学校の怪談」で用いられる「数」は、民話と同様に、伝承を円滑にする役割を果たしているのではないかと推測された。

注

- 1) 噂話としての世間話は、「学校の怪談」の他に「現代民話」「都市伝説」とも呼ばれている(稲田・稲田(編)(2010: 240))。Brunvand(1981)は、現代アメリカの伝説を専門に扱い「都市伝説」(urban legends)という語を定着させた最初の書であると言えるだろう。その後、現代伝説とも呼ばれるようになった現代民話(都市伝説)は、池田(他)(編)(1994)、近藤(他)(編)(1995)やBrednich(2002)などのように国内外で多く出版されている。
- 2) 宮地(1972)によると、数詞は、数を表す部分と数えられる対象の種類を示す助数詞から成り立つ。例えば、「二つ」と「二月」は、「ふた-」という数を表す部分と助数詞の「-つ」、「-月」から成立すると考える。松本(2006: 33)も宮地と同様に、このように形式化された「数詞」に対して、助数詞が伴わない数字のみの「数」(例: 一, 二, 三など)を区別している。本稿では、基本的には数詞を扱うことになるが、主に「数」を表す部分に焦点を当てて検討するため、「数」と「数詞」という用語を、厳密に区別はしていない。
- 3) 柳田(1934)の『民間伝承論』は、『柳田國男全集』(1998: 第8巻, 筑摩書房, 東京)に収録されている。
- 4) 初出は1932年である。
- 5) 折口(1995: 320)は、「お伽草子」とは江戸期の本屋が勝手に同じ種類の話を集めて売った本のタイトルであると述べている。『広辞苑第六版』で「お伽草子」の項を参照すると、渋川版『お伽草子』とは、享保(1716~1736)

頃の大阪の書肆渋川清右衛門の刊行した「文正草子」「鉢かづき」以下23編の称である。

- 6) 初出は1937年である。
- 7) 橋爪(1994:34-48)によると、「場面型」化物屋敷の誕生は、一般大衆に怪奇談が普及した19世紀初頭の江戸である。18世紀末から19世紀前半(寛政年間から文化・文政頃)にかけて、怪奇談が市中に流布した中で、歌舞伎の怪談が典型であると指摘している。当時歌舞伎は人気が高かったが、暑い夏は芝居小屋の入りが悪く、四代目鶴屋南北は一計を案じ、妖怪と幽霊が活躍する狂言である『天竺徳兵衛いこくばなし』を書き下ろし、出世作となった。以後、南北は、夏狂言の恒例となる幽霊芝居を書き続け、三代目菊五郎の当たり狂言の「東海道四谷怪談」を発表した。
- 8) 『広辞苑 第六版』によると、「御霊信仰」とは、疫病や天災を、非業の死を遂げた人物などの御霊の祟りとして恐れ、御霊を鎮めることによって平穏を回復しようとする信仰。
- 9) 高木(2005: 212-218)は、今野圓輔が折口信夫の「怪談」を受け継いだと考え、『日本怪談集』の2冊を取り上げて検討している。今野は、口承文芸の資料集を作成する目論見で、「世間話」としての「怪談」に向かおうとしたのだが、実際には、内容に焦点を当て、口承研究はされなかったと高木は次のように説明している。

…今野の『日本怪談集』は、読み物としての興味である話材(内容)が優先され、話され方、語られ方、書かれ方、あるいは聞かれ方、読まれ方に対する分析はほとんどなされなかった。仮にいまここで、<口承>研究の一環として「怪談」を論じるとして、今野のように言説分析の配慮をおこなわなかったならば、それは致命的陥穽だと批判されることになるはずである。

けれども、今野圓輔の研究状況の限界はあったにせよ、柳田國男の心意現象としての妖怪研究だけではなく、口承文芸としての怪談研究を試みようとしたことの意義は、いまここにおい

でも評価できよう。(高木 2005: 218)

- 10) 松谷(2000: 167-184)では、「学校の怪談」を「トイレ」「校舎」「妖怪」などの視点から考察している。
- 11) 高木(2005: 220-222)によると、常光(1993)の「学校の怪談」は、「学校の世間話—中学生の妖怪伝承にみる異界的空間」(『昔話伝説研究』12号, 昔伝説研究会 1986)をもとに、次の2論文を加えて再構成されたものである: ①「こどもと妖怪◎学校のトイレ空間と怪異現象」(岩本(他)編『混沌と生成』雄山閣出版 1989) ②「うわさ」としての怪談」(『民話の手帳』39号, 日本民話の会 1989)。また、常光(1993)に加筆・訂正されたのが常光(2002)である。
- 12) 常光(1993)によって番号がつけられた話は、12話であるが、その他に現代の話2話(p. 8, pp. 10-11)が紹介されている。
- 13) 山田(2005:144)の経験から勤務先の高校生から聞いた怪談はわずかではあったが、二種類に分類されると述べている。一つは、生徒が修学旅行や部活動の合宿で行なわれる娯楽としての「怪談」である。もう一つは、「日常」のコミュニケーション中に不意に始まる「怪談」で、話し方に技巧を凝らすことは避けられる傾向がある。
- 14) この理由は、口承資料が読みにくいため、または、本が売れないからかもしれないと高木は想像している。
- 15) 関敬吾(1935)に、柳田が「採集期の問題」というタイトルで書いた序文。
- 16) 茂木(1993:18-9)は、大学生である著者が女子寮で聴いた怖い話(著者は『伝説と俗信』というタイトルをつけている)を筆記した。全部で17話あり、調べてみると、11話に数詞が含まれ64.7%に相当する。以下に一例をあげる。

4階の南端の部屋で深夜に男子寮とゼスチャーで交信をしていた。翌日話をしてみると2人しかいないはずの室内に、3人目の髪の長い女性

が見えた。彼女は後ろで手を振っていた。

- 17) 一桁の数で、民話と怪談ともに、「1」「2」「3」の使用頻度が他の数に比べて高い理由は人間の数の認知という視点から説明できるかもしれない。例えば、松本(2016: 151-152)は、ピジン・クレオールの代表的なニューギニアのトク・ピシン語の最も複雑な代名詞の体系は、単数、双数、3数、複数と4項で表現されると報告している。この体系では、特定の数としては、「1」「2」「3」に相当する形態があるので、「4」から上の複数は一つのカテゴリーと考える傾向があると推測される。これは、「3」までが、「4」以上の数とは区別されて、個別の数の単位として認知されることを示す適切な例であると考えられる。
- 18) 『反対語対照語辞典』第6版では、[真っ赤]の反義語は、[真っ青]であり、[真っ暗]の項目はあげられていない。また、[暗い]の反義語は、[明るい]であり、[闇]は、[光]、[明かり]が反義語とされている。さらに、[真っ黒]の反義語は、[真っ白]である。ところが、[黒]に対して、[白]と[赤]が反義語とされている。従って、この辞典では、[真っ暗-真っ赤]の対立は反義語としての記載がないが、反義的要素が濃厚な対立であることは否定できない。
- 19) 『活用自在反対語対照語辞典』第4版、『反対語対照語辞典』第6版、『反対語便覧』の3冊すべてに、[イエス - ノー]が反義語として収録されている。

参考文献

- 池田香代子・大島広志・高津美保子・常光徹・渡辺節子(編) 1994. 『ピアスの白い糸—日本の現代伝説』 白水社, 東京.
- 一柳廣孝(編) 2005. 『「学校の怪談」はささやく』 青弓社, 東京.
- 稲田浩二・稲田和子(編) 2003. 『日本昔話百選(改訂新版)』 三省堂, 東京.
- 稲田浩二・稲田和子(編) 2010. 『日本昔話ハ

- ンドブック新版』三省堂, 東京.
- 岡本有紀子 1996. 「中学校の同級生にファミリーレストランで怖い話をしてもらおう」『川崎の世間話』調査団(編)『川崎の世間話—「川崎の世間話」調査報告書』20-40, 川崎市民ミュージアム, 神奈川.
- 折口信夫 1995. 「日本文学発想法の一面」『折口信夫全集』第4巻. 中央公論社, 東京.
- 折口信夫 1996. 「雄略記を循環して—お伽話と長話の二形式」『折口信夫全集』第15巻, 中央公論社, 東京.
- 清海節子 2015. 「民話における数の種類と役割(1)—先行研究と日本民話に於ける数の用法」『駿河台大学論叢』50: 45-78.
- 清海節子 2016. 「民話における数の種類と役割(2)—日本民話にみられる「数」の組み合わせと伝承機能としての役割」『駿河台大学論叢』49: 125-159.
- 久保孝夫 1997. 『女子高生が語る不思議な話』青森県文芸協会出版, 青森.
- 近藤雅樹・高津美保子・常光徹・三原幸久・渡辺節子 1995. 『魔女の伝言板—日本の現代伝説—』白水社, 東京.
- 今野圓輔 1969 (1974⁹). 『日本怪談集—幽霊篇』(現代教養文庫) 社会思想社, 東京.
- 今野圓輔 1981 (1999¹¹). 『日本怪談集—妖怪篇』(現代教養文庫) 社会思想社, 東京.
- 高木史人 2005. 「怪談の階段」—柳廣孝(編) 197-246.
- 常光徹 1993. 『学校の怪談—口承文芸の展開と諸相』ミネルバ書房, 京都.
- 常光徹 2002. 『学校の怪談—口承文芸の研究I』(角川ソフィア文庫 279) 角川書店, 東京.
- 野村純一・佐藤涼子・江守隆子(編) 1985. 『ストーリーテリング』弘文堂, 東京.
- 橋爪紳也 1994. 『化物屋敷』(中公新書1195) 中央公論社, 東京.
- 松谷みよ子 1987 (1995⁴). 『現代民話考7—学校ほか—』立風書房, 東京.
- 松谷みよ子 2000. 『現代の民話—あなたも語り手, わたしも語り手』中公新書, 中央公論社, 東京.
- 松本克己 2006. 『世界言語への視座』三省堂, 東京.
- 松本克己 2016. 『ことばをめぐる諸問題—言語学・日本語論への招待』三省堂, 東京.
- 宮廻和男 1995a. 「パフォーマンス, テキスト, ジャンル—理論的考察(上)」『法政人類学』63: 12-18.
- 宮廻和男 1995b. 「パフォーマンス, テキスト, ジャンル—理論的考察(下)」『法政人類学』64: 3-13.
- 宮地敦子 1972 (1981²). 「数詞の諸問題」鈴木一彦・林巨樹(編)『品詞別 日本文法講座 2: 名詞・代名詞』56-78, 明治書院, 東京.
- 茂木真佐美 1993. 「すみれ寮のフォークロア(中)」『法政人類学』56: 5-19.
- 柳田國男 1935. 「採集期の問題」関敬吾『島原半島民話集』序文, 建設社, 東京.
- 柳田國男 (1998). 「民間伝承論」『柳田國男全集』第8巻, 筑摩書房, 東京.
- 山田巖子 2005. 「「社交」と「ふるまい」—学校という舞台—」—柳廣孝(編) 135-165.
- 吉沢和夫 1985. 「民話運動から見た「語り」」野村他(編), 141-159.
- Brednich, Rolf Wilhelm. 2002. *Die Spinne in der Yucca-Palme: Sagenhafte Geschichten von heute*. München: Verlag C. H. Beck oHG. (ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒ, 『悪魔のほくろ—ヨーロッパの現代伝説—』, 訳: 池田香代子・真田健司, 白水 Uブックス 1065, 2003)
- Brunvand, Jan Harold. 1981. *The Vanishing Hitchhiker: American Urban Legends and Their Meanings*. New York, London: W.W. Norton & Company. (ジャン・ハロルド・ブルンヴァン, 『消えるヒッチハイカー—都市の想像力のアメリカ—』, 訳: 大月隆寛・菅谷裕子・重信幸彦, 新宿書房, 1997)

- Fine, Elizabeth, C. 1994. *The Folklore Text: From Performance to Print*. Bloomington: Indiana University Press.
- Jacobson, Roman. 1960. 'Linguistics and Poetics' in T. Sebeok (ed.), *Style in Language*, 350-77. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Moore, Robert, E. 1993. 'Performance form and the voices of characters in five versions of the Wasco Coyote Cycle.' In John A. Lucy (ed.), *Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics*, pp. 213-240. Cambridge: Cambridge University Press.
- Moore, Robert, E. 2009. 'From performance to print, and back: Ethnopoetics as social practice in Alice Florendo's corrigenda to "Raccoon and his Grandmother".' *Text & Talk* 29 (3): 295-324.

辞典

- 『広辞苑 第六版』(電子版) 新村出(編) 2008. 岩波出版.
- 『活用自在反対語対照語辞典』 第4版 反対語対照語辞典編纂委員会(編) 1998 (2006⁴). 柏書房.
- 『反対語対照語辞典』 第6版 北原保雄・東郷吉男(編) 1989 (1998⁶). 東京堂出版.
- 『反対語便覧』 三省堂編修所(編) 1996. 三省堂.